

「国際交流員」と 進める都市の国際化



せきぐち よしふみ
関口 芳史

とおかまち
十日町市長(新潟県)



まえだ こういち
前田 康吉

たきかわ
滝川市長(北海道)



くぼた しょういち
久保田 章市

はまだ
浜田市市長(島根県)



ふじわら やすゆき
藤原 保幸

いたみ
伊丹市長(兵庫県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

地域レベルでの草の根の国際化を推進することを目的として、海外の青年を日本に招く「JETプログラム」。1987年の事業開始以来、73カ国から6万8000人以上が参加し、外国語教育の充実や地域の国際化に貢献しています。特に、グローバル化が進む中で、大きな役割を担っているのが、国際交流の橋渡し役である国際交流員(CIR)。外国人観光客の誘客など、さまざまな都市政策にも携わっています。

座談会では都市の国際化、インバウンドの促進に向けて、JETプログラムを利用して国際交流員を積極的に採用する前田・滝川市長、関口・十日町市長、藤原・伊丹市長、久保田・浜田市長にご出席いただき、これまで進めてきた国際化の歴史や効果、国際交流員の活躍の様子、子どもたちへのアプローチなどについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



「世界に通じる
国際田園都市」を目指し、
100カ国以上から延べ
1000名を超える研修員を
受け入れてきました。

前田 康吉
滝川市長(北海道)

年月を掛けて「内なる国際化」を推進

細川 グローバル化が進展し、外国人観光客が年々増加する中で、都市の国際化は、各自自治体においても大きな課題となっています。今回は、「JETプログラム」を活用して、国際交流員(CIR)を採用し、国際交流の推進、国内外に向けた情報発信など、さまざまな施策を進める都市の市長にお集まりいただきました。

それでは各都市の国際化の現状と国際交流員のご活躍の様子についてお聞かせください。

前田 私が標榜するまちの姿は「世界に通じる国際田園都市」。その言葉の通り、滝川市は長年にわたり国際化を前面に出したまちづくりを進めてきました。

その推進役を担ったのが、1990年に設立された滝川国際交流協会です。1993年には米国マサチューセッツ州スプリングフィールド市と姉妹都市盟約を結び、これまでに500人以上の市民が交流してきました。また、1995年からはJICA(国際協力機構)と連携しながら、滝川市が誇る高い農業技術を中心に、さまざまな分野で100カ国以上から延べ1000名を超える研修員を受け入れてきました。

実は私自身も、協会の立ち上げに携わり、かつ北海道議会議員時代には10年以上にわたって会長を務めるなど、市長就任前から滝川市の国際化に深くかかわってきました。

さらに、市長就任後は、市役所内に「国際課」(現在「観光国際課」)を設け、市を挙げて国際交流、国際協力を進める体制を整えました。今では、課長、国際交流員を含め8名が、業務に当たっています。全職員300名余りの自治体としては、かなり充実した組織体制だと自負しています。

さらに、JETプログラムを活用し、早くからALT(外国語指導助手)や国際交流員を採用してきた実績もあります。現在は、アメリカ、シンガポール、モンゴルの3名の国際交流員が、外国人観光客の誘致や多文化共生の支援、国際交流のための各種行事の推進に努めています。

関口 十日町市は、まちの主力産業であった織

物業が構造的な不況に陥って以来、地域の活力が減退し、近年は人口減少も進んでいます。この減少傾向を食い止めることは容易ではありません。では、このような状況下でいかにまちづくりを行っていくか。私は、市の施策を応援してくれる国内外のファンをつくること、そして、交流を深める中で、まちの良さをみんまで見出し、磨きを掛けていくことが大切だと考えています。

そうした中で、現在、力を入れている取り組みの一つが国際交流です。十日町市では1975年、同じ絹製品の産地でもあるイタリア共和国コモ市と姉妹都市提携を結びました。時間が経過する中で、その交流活動も下火になっていました。そこで、2016年からは、採用した国際交流員とともに、両市の生活文化



モンゴルからの農業技術研修員に通訊する国際交流員(左)(滝川市)

子どもたちには物おしせず、
恥ずかしがらずに
外国人と楽しく
コミュニケーションを取る
マインドを身に付けてほしい。



関口 芳史
十日町市長(新潟県)

を紹介する取り組みを進めるなど、交流の活性化に向けて努力しています。

また、十日町市は2002年の日韓サッカーワールドカップで、クロアチアのサッカー代表チームが市内で事前キャンプを行って以来、16年間にわたって同国との交流活動を行ってきました。さらに、2016年からスタートした「クロアチアホストタウン推進事業」をより強力に推進するため、同国出身者を国際交流員として招へいしました。クロアチアのスポーツ庁長官

とも直接コンタクトを取り、十日町市を訪れる手はずまで整えるなど、行動力が抜群の青年で、現在、国際的イベントの企画・実施など、多方面に活動しています。

藤原 長い歴史を振り返ると、日本における国際化には、一つの共通点を見出すことができず。それは外国人に日本に来てもらい、進んだ知的ノウハウや技術を獲得してきたということ。例えば、古代の律令時代には、大陸から海を渡った渡来人を介して、先端的な知識・技術などを得てきました。近代に入っても事情は同じです。アジアで欧米列強の植民地化が進む中で、日本は明治維新以降、従来の鎖国方針を転換し、富国強兵、殖産興業の国づくりを進めます。この時代は、いわゆる「お雇い外国人」を通じて、欧米から進んだ知識、技術を学びました。

しかし、戦後になると、国際化の形も変わってきます。日本経済が飛躍的に成長を遂げるに従い、日本人が海外でビジネスを行う、あるいは海外旅行に出かけるケースが格段に増えました。反面、さらに時代が下って、今のような成熟期に入ると、今度は労働力の確保などに向けて、多くの外国人を迎え入れることが重要になってきました。

海外に出ていくときは、行政としては「行ったらっしやい」と送り出せばいい。しかし、迎える場合には、地域をPRしたり、訪れた方々に対しておもてなしをしたりする必要が出てきます。

伊丹市ではその迎え入れる基盤が十分ではなかったこともあり、2017年に、イギリス人の女性の国際交流員を採用しました。現在、SNSなどを活用して伊丹市の魅力の発信に努め



市内の小学校で実施した「クロアチアに親しむ授業」。右は国際交流員、左は講師を務めた、ブラジェンカ・フラスティッチ駐日大使夫人(十日町市)

ているほか、外国人観光客への情報提供やおもてなしなどを推進しています。

久保田 浜田市は、島根県西部の人口約5万5000人の小都市ですが、多くの外国人が暮らしています。市内にある島根県立大学では、中国や韓国など、アジアを中心に大勢の留学生が学んでいます。また、基幹産業である水産業や水産加工業に従事する外国人も多く、現在の外国人住民の数はアジア諸国を中心に約600人と、市の人口の1%を超えています。さらに、近年は国際貿易港の浜田港に寄港するクルーズ船も増え、海外の方々が浜田のまちを巡る光景をよく目にします。

浜田市では、中国の複数の都市と友好都市協定を結んだ1990年代に、初めての国際交流員を採用しました。それから20年以上が経過し



清酒発祥の地である伊丹市の魅力を世界に発信する国際交流員(伊丹市)

た現在は、中国、アメリカ、ベトナムから来た3人の国際交流員が市内で活動しています。通訳や翻訳といった行政の手伝いだけでなく、地域や公民館に出向き、母国の料理や文化を紹介したり、語学講座の講師として活動するなど、市民との交流を積極的に進めています。

さらに、近年、市内に居住する外国人住民が増えるに伴い、ゴミ出しのルール、災害時の対応など、外国人住民が地域で安心して暮らしていくための情報提供役も担ってもらっています。

行政主導から民間ベースでの国際交流へ

細川 いずれも、国際交流員の力をうまく生かしながら、活発に都市の国際化を進めていらっしゃいますね。ところで、お話を聞きしてい

ますと、都市が進める国際交流自体も、時が経過するにつれて、その内容が変化している面もあるように感じましたが、いかがでしょうか。

久保田 確かに、時代の影響は受けているでしょうね。1970年代から90年代に掛けては、国際交流が歓迎される、ある種のムードが全国的に形成されていたように思います。また、当時は典型的な行政主導の交流だったと思います。

これからは労働力の確保という側面から、地域経済の活性化という面からも、多くの外国人を迎え入れざるを得ないでしょう。

藤原 保幸
伊丹市長(兵庫県)

藤原 しかも財政が豊かな時代でしたから、伊丹市でも友好都市である中国の佛山市に「伊丹佛山友好交流センター」を設置するなど、国際交流に大きな予算を掛けることができました。ところが、財政が苦しくなると、そういうことはまずできません。国際交流によってどんなメリットがあるのか、疑問に感じる市民も出てきている中で、行政主導の国際交流の推進が難しい時代に入ってきました。

久保田 そうした時代の流れを受けて、近年は国際交流の内容が、行政主導から民間ベースの交流へと変化してきたように感じます。例えば浜田市では、市内に根付く紙すきの技術をブータン王国に供与したことから始まった、民間同士の草の根の交流が発展し、ブータン王国と市との交流協定の締結に至りました。国際交流員としてベトナム人を採用したのも、市内の経済団体からの要請を受けてのことです。国際交流の分野でも民間の動向や意向が重要な時代になってきました。

前田 滝川市の研修員受け入れをはじめとした国際協力事業も行政主導で始まりましたが、多くの市民がかかわり、また海外からの研修員が身近な存在になってくるにつれて、国際交流に対する理解は市民レベルでもかなり進んできたように思います。

関口 日韓サッカーワールドカップの事前キャンプをきっかけにしたクロアチアとの交流が、これだけ長年にわたって続いているのは、地元のサッカー協会の熱心な働き掛けも大きいですね。これも民間の活動の成果といえると思います。

また、現在では「クロアチアホストタウン推進事業」の一環で、学校給食においてクロアチアの

国際交流員には
外国人住民が地域で
安心して暮らしていく
ための情報提供役も
担ってもらっています。



久保田 章市
浜田市長(島根県)

料理を提供したり、同国の歴史や文化などを学ぶイベントを開くなど、多彩な活動も行っています。こうした活動も市民理解を深めるために重要ですが、それを進める上で欠かせないのが、その国の文化に通じた国際交流員の存在です。

藤原 伊丹市の国際交流員もとても魅力的な女性で、市民の中にも大勢のファンがいます。日ごろの交流を通じて、市民の国際理解も進んできていますし、市庁舎内の国際化にも貢献してもらっています。

前田 国際交流員が活躍する場合は、市内だけではありません。例えば滝川市で採用したシンガ

ポール出身の国際交流員は、高校生を対象にシンガポール発展の礎となっている外国人労働者の実態や多文化共生を学ぶスタディツアーを行ったり、SNSなどで観光PRをするなど、多様な形で活動を展開しています。

久保田 浜田市ではこれまで約30人が国際交流員を卒業しましたが、せっかくのご縁を絶やさずに、今後もまちの発展に向けて応援してもらおうと、「はまだ虹の大使」を委嘱して、市のPR活動をお願いしています。

次代を担う子どもたちへのアプローチ

細川 日本が今後、世界の中で存在感を示すためには、国際的に活躍できる人材の育成も必要になります。その意味では、次代を担う子どもたちへのアプローチも重要になるのではないのでしょうか。

藤原 常識的に考えれば、今の子どもたちが大人になるころには、国際化はさらに進んでいるはずですが。特に資源がない日本は、世界と協調していくしかないから、国際的な感覚を身に付けた人材を、国、そして地域が積極的に育てていかなければいけません。

端的に言って、大学に入ってからそうした人材を育てようとしても遅いですね。小さいときから外国に親しみ、外国人とも日常的に触れ合う中で、国際人は育成されていくと思います。その点でも市民と日常的に接する国際交流員の役割は大きいと思います。

前田 国際人の条件の一つは、英語の習得です。滝川市ではALTの協力も得ながら、中学3年生の時点で全生徒が英検3級を取得することを目標に指導しているほか、英検の受験に繋がる



国際交流員と児童クラブの小学生が触れ合う「国際交流子どもの集い」(浜田市)

能力判定テストの受験料も負担しています。

ただ、外国人とコミュニケーションを取るには、言語だけ学んでも不十分です。海外では、必ずと言っていいほど日本のことを聞かれますから、日本の歴史や特徴をしっかりと学ばなければいけません。

藤原 語学やコミュニケーション能力は必要ですが、訴えるべきものを持っていないければ、単なる通訳になってしまいます。それは将来的にはAIで代用することもできるでしょう。

日本の良さ、地域の素晴らしさを学び、揺るがない自分自身の信念も形成する。そうした真の意味で国際的に活躍できる人材を育成することが大切です。

関口 日本人が外国人とコミュニケーションがうまく取れない理由に「言葉の壁」ばかりが強調



細川 珠生
政治ジャーナリスト

細川 最後に、都市の国際化に向けた今後の抱
これからの国際化を見据えて

されますが、それだけではありません。私自身も過去に留学した経験があるのですが、やはりメンタルの問題も大切だと痛感しました。

現在、十日町市では、少子高齢化が進む松之山地区の小中一貫校「まつのやま学園」で、ALTや国際交流員の力も借りながら、子どもの英語力の育成を図るプログラムを推進しています。もちろん、語学力の習得も大切ですが、ALTや国際交流員と触れ合う中で、子どもたちが物おしせず、恥ずかしがらずに、外国人と楽しくコミュニケーションを取るマインドを身に付けてほしいと考えています。

久保田 小さいうちから外国人と話をして、外国の様子を耳にする経験を持つことで、子どもたちは自然と海外に目を向けるようになっていきます。その意味では、子どもたちが国際感覚を養う上で、国際交流員は欠かせない存在です。実際に浜田市では、国際交流員やALTが小学校を訪問するなど、子どもたちとの交流活動に力を入れています。

負などについて、お話しください。

久保田 鳥根県西部の石見地方には、「石見神楽」という伝統芸能があります。浜田市は神楽を演じる社中が60ほどもある石見神楽のまちです。この伝統芸能を発信し、浜田の文化を世界の方々知っていただきたいと、東京オリンピック・パラリンピックに合わせて、神楽上演できるような、関係方面に働き掛けています。石見神楽を見て、ぜひ、本場浜田市にも来ていただきたい。その際には、国際交流員の皆さんに、説明や通訳をお願いしたいと思っています。

関口 十日町市では2000年から3年に1回の間隔で、国際的なアートプロジェクト「大地の芸術祭」を開催してきました。イベントを支えてくれるボランティアさんを含め、多くの外国人が当市を訪れ、イベントやまち自体の素晴らしさをほめてくれますが、そうした評価は確実に市民の自信になり、まちに対する誇りを高めています。これからも、国際交流員とともに、都市の国際化を進め、地域の活性化に努めていきたいと思っています。

藤原 これからの自治体経営を考えると、国際化を避けて通るわけにはいきません。日本は既に人口減少時代に入っていますから、労働力の確保という側面からも、地域経済の活性化という面からも、多くの外国人を迎え入れざるを得なくなってきました。自治体はそのための施策の推進に取り組んでいく必要があるし、それに對する国の支援もぜひ望みたいですね。

前田 私も今後、人口減少がさらに進む中で、地域においても労働力不足が深刻化すると考えています。それを補うためにも、外国人の力は非常に大きいですね。滝川市ではその点も見据

えながら、さらに、外国人の受け入れ体制の整備に力を尽くしていきます。

細川 都市の国際化について、幅広くご議論いただきました。特に、私が興味深くお聞きしたのは、子どもたちを対象にした人材育成についてです。近年は日本人の海外留学者が減少するなど、若者の内向き志向が顕著になっていますが、いずれの都市も国際交流員の力を活用しながら、子どもたちが国際感覚を身に付けるための取り組みに力を入れていってほしいなことが分かりました。

今後も国際交流員や関係者と連携しながら、一層の都市の国際化に向けて、ご努力いただきましたと思います。本日はありがとうございました。(平成30年7月10日、全国都市会館にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は11月号に掲載予定です。

